

第 14,15 回課題 レポート 解答例

課題 「教育社会学」の授業で取り上げられたテーマや内容の中から 1 つを選び、それに関してレポートを書いて下さい。字数は 400 字～1200 字程度

A

これまでの教育社会学の講義の中でとくに印象深かったのは、第 5 回「学校へ行くことの意味、教師の役割」について考えを深めたことだ。

私は第 5 回の課題や参考資料を読み、不登校になってしまう要因はどのようなものが考えられるのだろうか、なぜ私自身は学校へ通い続けることができたのかと疑問に感じた。これまでのすべての授業を通して学んできたことを基にしながら、「学校へ行くことの意味、教師の役割」について①学校だから出来ること・学べることは何か②児童が何をもちて学びたいと感じるのか③教師に出来ることは何か 改めて考えていく。

①に関して一学校へ行くことで学べることは学習面だけでなく協調性・コミュニケーション能力・役割分担・善悪の判断等があると考え。学習面での学びを多く得たいのなら学習塾のみで十分だと感じるが、学校だからこそ学べるのは他者との関り方や考え方の柔軟性、自分に出来ることや得意なこと苦手なことを見つけるといった自分自身を知ることも学校で学べることの 1 つなのではないかと考える。

②に関して一興味や関心を持ったり自分に出来ないものがあることへの悔しきや競争心を持ったりすることから学びたいと感じることが多いのではないかと考える。学びの幅は限りなく広く、また、教科の垣根を越えて様々な知識や経験を生かせる場面が多くあり、学びにはきりが無い。そういった知ることの面白さを感じたときに学びを深めたいと感じるのではないだろうか。

学校生活の中では委員会や部活動などで年齢の違う人とも関わる機会が多くある。人と関わるが増えると、相手の行動・発言などから様々な影響を受ける機会も増える。人とのかかわりによって学ぶきっかけができることもあると感じる。

③に関して一児童一人ひとりの個性や特性を知り、一人ひとりを見ることだ。私自身学校に通い続けることができたのは、周りにいた友達の存在が一番大きい。しかし、これは運が良く、恵まれていたことであって、すべての人がいい人に出会って助け合っているとは限らない。だからこそ、教師は児童一人ひとりに寄り添って、常に見守っていること、必要な時には必要な分のサポートができるのだということを児童に感じてもらえるような安心感を与えることや信頼を築いていくことが教師に出来ることなのだと感じる。

また、授業をわかりやすく興味深いものにするためには教師の専門性も必要だろう。教師も児童と一緒に前向きに学び続けている姿勢でいることが大切なのだと考える。

まとめると学校が必要な理由としては、広く大きな社会に出る前の準備段階の場であるからだと考える。上下関係や規律を守ること、人と関わること、自分自身の考えを持ち他者

に伝えることなど学校生活での学びや経験は社会に出たときに必ず生かせる。

これまでの授業の中で、教育が社会に影響を与え、社会が教育に影響を与えているという相互作用の関係性があると知り、ものの見方や考え方を柔軟にして思考してきた。

その中で、教育や社会に関する諸問題が数多くあることを知り、フィードバックや他の受講生の考え方からも学ぶことが多くあり、今の教育や社会に関して知ろうとしたり、自分自身はどう思うのか思考したりすることの大切さに気づいた。

だからこそ教師を目指す者として、私自身も柔軟なものの見方や考え方をもち、幅広い知識や教養を身につけ、第5回の参考資料にも書かれてあった諸問題に関して、また、「学校へ行くことの意味、教師の役割」について、より良い学校教育の在り方を今後も私なりに思考していきたい。

B

私は学校に通うことが全ての子どもに必ず必要だとは考えていない。また、全ての子どもが学校に通わなくて良いとも考えていない。なぜなら、学校はたくさんの社会化エージェントの中の1つであり、学校で学ぶことが全てではないからである。

学校でしか得られない経験や学びとは、主に同世代の子ども達と集団で生活することで得られる物だろう。だが集団で生活することが不得手な子どももいる。その場合、多くの失敗経験を重ねたり、クラスに馴染めなかったりして、社会で生活するための学びや経験を得るどころか、人格形成に多大な影響を及ぼす可能性がある。そういった理由で、不登校になってしまう子どもが少なくはないのではないかと私は考えている。現に令和2年度に文部科学省が行った、不登校児童生徒の実態調査では小中学校共に、友達や担任の先生との人間関係に悩み学校に行きづらいと感じた人が大半を占めている。

そして不向きなのであれば、必ずしも学校に通うのではなく、子どもが学びやすい環境を整えることが大切だろう。その手段の1つとしてホームスクーリングが挙げられるが、日本ではホームスクーリングに関する法律も制度も存在していない。つまり支援体制が整っておらず、学校教育に匹敵するだけの教育を保護者が子どもに施すことが難しいと言える。具体的には、教科書など本来は税金で購入され配布されている物を、実費で購入しなければならないのはもちろん、教員免許を取得している教師に並ぶほどの教育を、一般家庭では提供することが難しいと言える。

また、少なくとも教え方の違いで学校の教師の役割を、塾講師や親や他の人が変わることはできないと考える。塾講師や一般的な人の教え方は、問題に対する近道をすぐに教えるやり方であり、児童に体験させ自ら発見させて学ばせるやり方ではない。このような子どもが主体ではない勉強では、子どもの発想を制限させかねないものである。そのため学校教育で行われている、子どもが主体となって学ぶ学習を通して、児童の発想を引き立てる教育は、他では替わることができないと考える。

ただし、子どもが自分から課題を見つけ、解決のために様々な学びや気づきを得るといっ

た、あくまで児童が主体的にホームスクーリングを選択し、自分から学びや気付きを得ようとする場を設けられるのであれば、学校に代わる1つの学習の場と言えるのかもしれない。

以上のことから、学校教育に通わなくても良いが、その場合は学校教育に匹敵する教育を子どもに与えなければならないとともに、あくまで学校ではなくホームスクーリングなどを選択する権利は、子どもが持つべきであると私は考える。また、家で親が一方的に教育を施すのではなく、子どもが主体的に学ぶ場を設けることが必要である。

C

最初に、「保護者が子供に普通教育を受けさせることが『日本国民の義務』」だ。その上で、学校に行く意味についてまた教師の役割についてレポートを書く。例えば、「勉強は家で一人だけでやるより、学校でやるほうがずっと楽だよ」と伝える。

子供たちの中には、学ぶ力をすでに身に付けていて、一人で勉強をどんどん進められる児童もいれば、出来ない児童もいる。特に、小学生の場合は、「一人で学び続ける姿勢」をつくるのが最も難しい。自分もそういうタイプだ。「1人で勉強をやりなさい」と言われたら全然やらないが、「友人と週2回勉強する」と決めて、勉強できる場所と機会を与えられればちゃんとできる。恐らく学校に行く意味もそこにあるのではないかと考える。

一方で、近年不登校児童の数が増加している。理由は、「いじめや人間関係」など色々ある。その為、無理してでも全ての子どもが学校に通わないと行けないとは思わない。ましてや最近では、「学校に通わない=サボリ」という考えは古いと言われている。

不登校の子供の立場を考えた時、学校は命や精神を犠牲にしてまで行くような場所ではないと思う。確かに、学校に行けばコミュニケーションが取れたり人生の選択肢が増える。しかし、コミュニケーションが取るのが苦手な児童や友達の輪に入るのが苦手な児童にとっては、苦痛だ。また、いじめを受けてる児童に対して、人とコミュニケーションを取りなさいなんて言えないだろう。したがって私は全ての児童が学校に通わなければ行けないとは思わない。そういう子どもは、通信制の学校に通い、自分のペースで学習するべきだと思う。

次に教師の役割として、ホームスクーリングを日本でも認めるべきだと思う。なぜなら、個人のペースで学習を進めることが出来るからだ。上記でも述べた通り、不登校児童の数が増えている以上、児童が自発的に学ぶ環境を作り出すことができ、児童が主体的になって、学習を進めることができ、その分、時間も有効的に使い周りのペースに合わせることが難しい児童や不登校の児童にとって適切な環境だと思うからだ。したがって、ホームスクーリングを認めるべきだと思う。確かに、塾講師や親が学校の教師の役割を果たせないかと言ったら嘘になるが、やはり、塾はあくまで勉強がメインな為、人との付き合い方を教えてはくれない。逆に、親は、人との関わり方を教えてくれるかもしれないが、教師や塾講師よりは勉強はできない。なので、教師の役割を変わりに果たすことは難しいと思う。以上の結果から、ホームスクーリングを認めるべきだと思う。

D

私は第 5 回の学校に行くことの意味、教師の役割の講義を取り上げてレポートを書いていこうと思いました。なぜなら、学校に行くことの意味についてもっと詳しく自分の考えを書きたかったのと、教師の役割を自分なりに考えてみたかったからです。

まず、学校に行くことの意味は社会で生きていくために必要な力をつけるためだと思います。同じクラスの仲間と、時には喧嘩をして、時には一緒に泣いて、それでも仲良く共に学校生活を送っていかなければいけません。その中で様々な問題に直面するのが、学校生活です。塾や家でただ勉強しているだけでは学ぶことのできない貴重な経験をすることが、学校では経験できます。それだけで学校に行くことの意味になると思います。

しかし、それでも行きたくない人、行く意味を見出せない人もいます。これは私個人の意見ですが、学校に行きたくない人は行かなくてもいいと思います。近年、多様性を認めようとする考え方が広まり、学校に行かなくてもよいという考え方が増えてきました。本当に辛い出来事や病気で行けない子どもたちは、仕方ないです。しかし、なかには安易な理由で学校に通うことから逃げ、向き合っていない子としない子どももいます。それは親や教師のせいでもあります。学校に通うことから逃げることを止めもしない、向き合おうともしない、そういう行動は無責任で、最低だと思います。

でも、学校に行けない理由を、私たち教師が決めつけることはできません。そこが難しいところです。勝手に決めつけてしまい、無理やり学校に来させたりしてしまうと問題になってしまいます。教師は保護者との関係を深くしていくことが役割だと思います。保護者を通して、子どもに学校に行く意味を伝えてもらい、少しでも行きたいという気持ちにさせてあげるのが、教師にできることだと思います。

教師というのは、時代が進むにつれて難しい立場になってきています。子どもに何かを言えば、それは保護者に伝わり、問題に発展することもあります。それに萎縮してしまえば、教師の立場はなくなってしまいます。だからこそ、教師は保護者と良い関係を築いていくことが大事だと思います。厳しいことを言っても、この先生なら信頼できると思ってもらえるような教師にならなくてははいけません。それが結果として、子どもたちのためにもなります。

このように学校に行く意味は、学校でしか学べないことや経験できないことがあるからだ、と私は考えています。しかし、それでも行く意味が分からない子、行きたくない子は行かなくてもよいとも考えています。教師の役割として、保護者と良い関係を築き、信頼してもらうことが役割です。そうすることによって、子どもたちへの教育の仕方の幅が広がっていくと私は考えています。

E

日本には義務教育という言葉がある。義務教育の目的を調べると『「人間力」を備えた市民となる基礎を提供すること』と文科省が提示している。これからの将来のための社会性を育むためにあるといえる。つまり、学校という場は学力を身に着けるといいう目的もあるが、

家との大きな違いは社会性を身に着ける場であるということが考えられる。

だが、必ずしも学校へ通うべきではないと思う。なぜなら、人によってははじめの被害を受けていたり何かの強いトラウマや重度のストレスを抱えていたり、個人の悩みを抱えている。そのような精神状態において自分からその環境下に行くことは大人であっても難しく、SOS を自分から出せない子供にとってはさらにストレスとなり個人を傷つけてしまう。

確かに学校に通わずにホームスクーリングなど教師以外に勉強を教わるとなると、教える人に専門知識もなく学習に差が出てしまうというデメリットは大いに考えられる。部活動で友情をめばえさせたり、いろいろな経験を積ませるということは、多くの学びを生みそれらは将来を生きる上で大切な財産となり大切な思い出となる。学校に通えることこそ一番よい形ではあると考えるが、個人の様子や精神状態から命があり、心と体が健康であるうえで生きていくために何がその子にとって必要なのかを考えることが大切だと考えた。

また、教師はただ知識を詰め込むのではなく、人と人との繋がりにおいて間違っただ道に進んだ時は軌道修正の手伝いをし、関わりの中での経験を積ませることが役割であると考えられる。

また上記であげたホームスクーリングは積極的に導入されるべきである。「何らかの原因があって学校へ行けない子供だから勉強ができなくて仕方がない。」という思考にはならず、不登校の子も学校へ通っている子と同様に学習をする機会を与えることが大人の責任だと考える。「違う学校であったら違ったかもしれない、、、」そんなタラレバを紡ぐよりも、子どもたちのニーズに合わせた教育をするべきである。

学校という場だけに限らず、学校に行けないのならば違った形で場所を提供し、全員の子どもたちに社会性や多くの経験ができるような場を提供することを、これからの将来で実現していきたい。そして、教員は不登校だからと保護者に全てを託すのではなく定期的に訪問し家庭と学校での両方での支援をすることが、保護者にはない専門知識を補うことができ、子供のためにできることである。

F

子どもたちが学校で教育を受ける意味と教師が努めなければならないことを考察する。以前の授業で、子どもが学校に行かない理由として、親による学校への見方が変化したことを学んだ。昨今では、親が子どもの教育に対して大きく関わっており、昔のように「学校に行きなさい」「学校の先生に教えてもらいなさい」という考えを持たなくなった。代わりに、現在は、学校に行くよりも「塾や家庭学習」に力を入れ、学校に行くことを否定する意見が出てきた。そこで、今回、塾や家庭学習ではなく「学校に行く・学校で教育を受けること」がなぜ必要なのかを考えた。

まず、「塾や家庭学習」を行うメリット・デメリットを考えた。塾に行くメリットは、学習習慣と受験に必要な情報が得られることである。学校のテストおよび受験で高い成績を

収めるには、日々の勉強へのモチベーションを必要とする。塾では、強制的に学習の環境が与えられ目標が明確になっているというメリットがある。逆にデメリットには、「受け身」な学習に終始してしまうケースがあることである。塾の先生が一方的に答えの出し方を伝え、ひたすら問題を解き続ける。ここには、子ども自らが考える隙を与えていない。

次に「学校」で学ぶ意味を二つ考えた。まず、一つ目は、学校は子どもの主体性をつける場であること。学校は塾よりも「主体性・自発性」を重要視している。学校では、総合的な学習の時間や多くの教科で、子ども自ら問題認識し、解決する取り組みを行っている。この問題解決学習は、将来社会に出た時に、自ら考え行動できる大人へと成長させることができる。よって塾などで受け身の授業を受けるよりも将来性が高い学習をうけられると考える。二つ目は、前回までの講義で学んだ「隠れたカリキュラム」である。それは、学校で多く学ぶことができ、学校で集団行動することによって身につくものだと考える。この「隠れたカリキュラム」が学校に行く大きな理由だと考える。変動していく現代社会を生き抜くためには、子どもは集団の中で生きていくことが必要になってくる。社会で生き抜くために、学校で人々と関わりを持たなければならない。

これらのことを踏まえて、教師は以下のことに努めなければならない。一つ目は、子どもたちの深い学習に繋がる授業形成である。子どもが「なぜ・どうして」と考えられるような発問や資料を使い子どもの学習意欲を高める必要がある。二つ目は、「隠れたカリキュラム」で悪い影響を及ぼさないようにする。そのためには、教師が子どものお手本となるような行動を行い、常に子どもに見られているという意識を持つ必要がある。

私はこれらのことから教育に対して情熱を注ぎ、子どもが深く学べるような授業のできる教員になりたいと考える。

G

第5回講義の中で、不登校について考えた。そのことについてもう少し詳しく私の考えを述べたい。現代の学校教育現場において、不登校は1つの社会的問題である。

まず不登校に対する私の考えは、不登校という選択肢をとってもよいと考える。つまり、必ずしも学校に行くべきだとは考えていないということだ。なぜなら、不登校児童、生徒が心身ともに健康でいられるのが「学校に通わないこと」なら、そうすべきだと考えるからだ。しかしながら、不登校児童、生徒をそのままにしておくという考えではない。第5回の感想でも述べたが、必ず、社会と繋げるべきだと考える。子どもを社会から孤立させてはならない。学校が「居場所」ではないのなら、他の「居場所」と子どもを大人が繋げるべきだ。必要な支援に繋げなければならないと考える。

その支援の1つとして、千葉県教育センターは、千葉県教育支援センター「ライトポート」というものがある。千葉県教育支援センター「ライトポート」は、小集団の体験を通して、社会性を育み、自分のペースで適応力を高めるための教室である。

私は今年度、週に1度ライトポート緑に行き、ボランティアを行っている。通っているの

は中学生が多い。主に子ども達と話したり、学習支援を行ったりする。約1年、ボランティアを通して感じたことは、みんな学校に通っている子達と何も変わらないということだ。この表現が合っているかは分からないが、一般的に学校に通う子達が普通の子というのなら、ライトポートに通っている子達も普通の子だ。話をすれば、明るく楽しそうに答えてくれる。その子にとって「居場所」となれば、学校に通っている子達と何も変わらない、そう感じた。1つでもその子にとっての「居場所」があれば、そこで勉強できるし、人間関係も学べる。学校でなくても子どもが育つ場所はあると感じた。

将来教員になったとき、不登校の児童、生徒に対して、見放すのではなく、社会と繋げるべきだ。もちろん、学校に戻ってこられるのが理想だと私は考える。しかし、学校に引き戻すことが最善とは思わない。その子が安心できる場所、自己肯定感を養うことができる場所が「居場所」だと私は考える。本人の意思を尊重し、「居場所」を見つける手助けを教員がしていくべきだと私は考える。だからこそ教員は、ライトポートだけでなく、他の支援についても学んでいくべきだ。必要な子どもに必要支援が届けられるように、子どもと社会を繋げることができるのは、我々大人であり、教員である。その子にとっての最善を教員は考えるべきだ。

(引用:千葉市よくある質問と回答 「ライトポート(千葉市教育支援センター)について知りたいのですが」)

H

皆さんは「小学校には行かせるべき」と思うだろうか。親に言われたから、義務教育だから、みんな行っているから、など様々な理由から学校に通っていた人が大半だと思う。しかし、それらの理由は学校に行く本当の意味なのだろうか。そのようなことに悩み、学校に行かなくなってしまった児童もいると考えられる。そこで今回は、「学校に行く意味」について考察していき、学校に行く意味が分からないといった悩みを少しでも解消し、主体的に学びに向かう姿勢を促せたらと思う。また、学校に行く意味の中でも、学校に行くことが困難である「不登校」の児童に焦点を当てて考察していく。

不登校の児童が学校に通うことには、大きく3つの利点があると考えられる。

1つ目は、他人を信頼することができる点だ。不登校の原因の1つとして人に信頼感を持たない児童が集団の中で失敗体験をして、心理的回復ができないというケースがある。これは集団の中で失敗経験をしたことによるショックは不登校になるきっかけでしかなく、原因ではない。問題なのは失敗してはいけないと児童が感じてしまう環境なのだ。そのため、周りの児童や先生が失敗することは決して悪ではないといったことを前提とした環境を作り、集団を恐れる場ではなく、安心して失敗ができる場所だと理解させることで、周囲との信頼関係を築いて行けると考えられる。

2つ目は、環境適応能力の向上についてだ。不登校の原因の1つとして傷つきやすさ、小心・心配性など環境適応能力の弱さが見られるケースがある。この場合は不登校の子どもが

自分を変えたいと考えている場合に限るが、適応能力の弱さなどを改善するには身近な外の社会である学校に行くのが良いと考える。学校に行くことにより自分と同じような心配性の人や、反対に楽観的な人などに関わることにより様々な人の在り方があるのだと理解し、自分を卑下することが減るのではないかと考える。

3つ目は、家族以外の安息の場を作れるという点だ。不登校の原因の1つとして家族の問題というのがある。これは家族の中に何らかのバランスの崩れや不健康さがあり、それが本人を心理的に不安定にさせてしまっているという場合である。この場合は家庭内の問題であり学校は対処できないように一見思える。しかし、学校に通うことにより児童の安息の場を与えることができ、また児童自身も、友達や先生などの信頼できる人に相談することができる。

ここまで不登校の児童が学校に行く意味を説いてきたが、学校に行くことが必ずしも正しいとは思わないでほしい。例えば、私の知り合いでライトポートで働いている人がいるのだが、そこで学習している児童も学校と遜色の無い内容を学習していると聞いた。そのため、様々な選択肢の中で、児童がどう生きたいかを尊重しながら学び舎を選んでいくのが理想的であると私は考える。

I

私は第2回講義の教育の社会的側面について、最も関心をもったためもう一度レポートを書きます。初めに教育の社会的側面の代表例は経済的な発展が挙げられます。教育を受けた労働者は高い能力と知識を持っており、生産的な仕事に従事しやすいため、国の経済成長に貢献します。次に犯罪率との結び付きです。全てがそうであるとは限りませんが、教育を受け、正しい道徳観や価値観を身につけることで犯罪を引き起こす可能性は低下し、治安の向上にも繋がると考えられます。その他にも、社会科の教育が政治、選挙に結びついたり文化や伝統、遺産にも興味を持つきっかけになり日本文化の伝承にも繋がります。次にフィードバックで頂いたコメントの、「教育の社会的側面の悪い部分」にも注目し考えてみました。1つ目は、差別と不平等の存在です。教育指導者による指導において個々の生徒で対応が違ったり家庭環境、経済状況が異なるため学習機会の平等が守られていない可能性が考えられます。

2つ目は、生徒が成績やテストに過度に重点をおいてしまうことでその他の能力や実践的な能力の育成が疎かになってしまうことが考えられます。バランスのとれた能力育成が求められます。

3つ目は、2つ目の内容に関連している事で、成績やテストなどの学業にプレッシャーや精神的な負担がかかるということです。実際に、若者の自殺原因で最も多いのは学校での問題でいじめの他にも成績不振といったストレスや不安を抱えてというのも確認できます。以上のことより、教育の社会的側面には良いところだけではなく、悪いところも記載した以上に多く存在するということが、第14・15回の講義でもう一度振り返ることで気付くとこ

ができました。

(半年間お世話になりました。講義のことになりますが、冊子や配布プリントを用意してくれた事で課題にも取り組みやすく上手く自分の意見もまとめることに繋がりました。また、解答例を載せて頂くことで自分自身の教育社会学のモチベーションにつながり、半年間一生懸命取り組むことができました。興味深く、分かりやすい講義をありがとうございました。)ですが、

J

学校に行くことの意味、教師の役割について述べる。「学校に行く意味はあるのか」これは誰しもが1度は考えたことがある内容なのではないだろうか。ホームスクーリングという手段があるにもかかわらず、私たちが学校に行く理由とは何かについて考える。

最近よく耳にする「ホームスクーリング」。この言葉の意味をきちんと理解している児童はどれくらいいるだろうか。学校に行かない理由は大きく分けて2つある。1つ目は、子どもたちが自分の意思で「学校へ行かない」ことを選択している状態の「積極的不登校」。2つ目は、引きこもり・無気力・家庭環境の問題など学習以前の支援を必要としている場合の「消極的不登校」がある。「ホームスクール」は「積極的不登校」のケースを指す。

<https://www.tsuushinsei-navi.com/real/hogosha/7088/>

子どもたちにとって、学校とは広大な世界である。家族ではなく、他人と接触することによってトラブルが生じたり、自分が苦手な人とも関わらないといけなかったり、学校の暗黙のルールの中で過ごすことによって、心身ともに多大なるストレスが生じる。子どもは学校という社会の荒波に立ち向かい、トラブルを乗り越えていかななくてはいけないのだ。私はこれを「社会へ出るための第1関門」だと考える。大人から見ると小さなトラブルであっても、子どもたちにとっては人生最大のトラブルといっても過言ではないくらいの困難である。このトラブルによって学校に行けなくなってしまうこともある。教師や家族は、この困難を子どもたちが乗り越えられるようにサポートしなければならない。それが役目であると考え。しかし、教師や家族のどちらかがサポートを放棄することや、子どもの悩みに気づかない場合も考えられる。そういった場合、子どもたちが学校で学ぶのか、家で学ぶのかと言う選択ができるようにホームスクーリングがあると考えた。対人関係のトラブルなどによる子どもの負担を考え、それを回避したいがために「ホームスクーリング」を選択するのではなく、対人関係によるトラブルは無駄な時間であり不必要と捉え、自分は勉学に時間を費やしたいといった子どもの場合を考慮したものが「ホームスクーリング」という選択肢であると考えた。「ホームスクーリング」は学校が勉学の妨げになる場合に適用されるのではないか。

私が思う学校に通う意味は「人と人との直接的触れ合いから社会に出た時、1人でも生きていけるような最低限度の能力を身に付けること」だと考える。つまり、社会と言う広いコミュニティで生きていくための準備段階である。社会には暗黙のルールや支配する側され

る側といった相対するものが入り組んで存在している。これらは本やネットの知識だけでは乗り越え難い。なぜなら、状況によって答えが変わるからだ。前回の正解が今回の正解とは限らない。また前回の失敗が今回の正解の可能性すらあり得るのだ。こうしたことに対応するスキルは、自分自身が経験しなくては得ることができない世の中に教えると言う役割を果たしている人は、教師以外にもたくさんいるが、こういった実践的学びを教え手助けすることが教師の役割であると考え。すなわち子どもの社会的自立を求めらるるのであれば学校に通う必要がある。単なる知識学力資格取得のためならば、ホームスクーリングでことを足りるのではないかと考える。

K

私は、この教育社会学を受けて、今まで学んできたことの中で第5回の学校に行くことの意味、教師の役割について取り上げていきたいと思う。まず、第5回の時に学校に行く意味について述べた時には、学校には基本的には行くべきで、ホームスクーリングには反対の考えであった。その考えは変わることなく、今も基本的には学校に行くべきだと考えている。前回の内容からまた考えたこと、また調査したことについて述べたいと思う。私は今アルバイトを2つ掛け持ちしていて、その中の1つで塾講師をしている。塾講師をしていると、生徒とのコミュニケーションの中で学校の色々な話を聞くことがある。例えば、部活の大会がいついつにあることや、体育祭、音楽発表会など様々な行事があることなどとても楽しそうに話してくれる。

私も学校にしっかりと通っていたため、懐かしいなと感じながら改めて考えてみると、学校という存在の大きさを実感した。塾とは違い、学校では集団生活をするため、様々なコミュニケーションの中で、礼儀やルールなど社会に出るために必要なことを学ぶことができる。これは、ただ勉強を学ぶだけなどの塾やホームスクーリングではできないことだと感じた。そのため、学校は必要なものだと私は考える。

次に、不登校の人たちの対応について、前回述べたときと同じように、不登校には様々な種類があるため、子どもと関わる中で悩んでいることを聞き出しそれに応じた対応、主にコミュニケーションに重点を置いて、対応する必要があると考える。

コミュニケーションをとっていくことによって、遠回りにはなると思うが子どもの中で何かしら、心が動いていくと私は考える。焦るのではなく、子どものことを待ってあげる姿勢が大切であり、その分その子どもの心が強くなると考える。今は不登校の子どもに対しての対応として、抽象的なことしか思いつかないが、実際の教育現場など、実習を通して学び、考えがまとめられるようになりたいと考える。

その上で、私が教師になっての目標である、子どもの可能性を広げてあげられるような教師を目指していきたいと思う。私は、1人の先生に憧れて教師を目指ようになった。私のように、教師に憧れて教師を目指して欲しいとは思わないが、何か子どもの人生の中で影響を与えられる存在になりたいと考えている。人生は一度きりという言葉があるが、教師と子

どももそのとき一度の関わりなので、一つ一つの関わりを大切にしていきたいと思う。

L

第12回の講義である、武内清「教育、大学、文学、ドラマ、日常」の感想について取り上げる。私は、その中で「Ⅲ-学校教育」について着目した。

他講義の中でも、今の教育界では「主体的・対話的で、深い学び」(アクティブ・ラーニング)を取り入れた授業が中心になっているということを知り、模擬授業などに積極的に取り入れている。「アクティブ・ラーニング」とは、これまで多かった教員の一方的な講義形式の授業ではなく、児童が自ら考えを広げ深めたり、児童同士で協働しながら問いを見いだして解決策を考えたりと、能動的に学習することを指す。

しかし、アクティブ・ラーニングの課題として、「5.アクティブ・ラーニング批判」を読み、授業内で教師の役割が失われていたり、取り組むべきことの優先順位が間違っていたりと、行き過ぎたアクティブ・ラーニングの事例があることを知った。アクティブ・ラーニングの重要性が盛んに論じられているばかりに、本来教師が必要に教育しなければならない部分と児童に考えさせるべき部分が混在してしまい、児童にとって最適な教育に繋がらなくなるとは本末転倒であると考えた。改めて「アクティブ・ラーニング」の重要性について考え直す必要があるのではないかと考えた。

また、ディベートや発表、グループワーク等の活動への参加が苦手な児童への支援方法が難しく、教員もどこまでアドバイスしたら良いかという児童の自主性との境界線がわかりにくいため、教員のファシリテーション能力と向上させる必要があると考えた。

今までの画一的な一斉授業は、受動的な学習であり、児童一人ひとりに学力の差が生まれてしまうなどといった問題が常につきまとっていた。

しかし、授業内で「協働的な学び」を取り入れることで、児童が主体的に考え、互いに意見を出し合い、学びが広がっていくという能動的な学習へ変化していくと考える。個別に学ぶだけではどうしても行き詰まり伸び悩むことがあるが、児童同士の学び合い「協働化」により、理解が深まり成長できるため、やはりアクティブ・ラーニングは重要であると考えた。

また、近年、教員の仕事の過重負担が問題視されることが多いと感じるが、教員一人ひとりがもっている実践的知識というものには限界があるため、自らの教育実践を捉え直し、他の教員等のもつ知識や技能を自分のものとしていく、つまり教員同士も協働することで「よい」教育に繋がっていくと考える。少しでも教員の負担を軽減するためにも、学びの「協働化」などを進めて行くべきだと強く感じた。

これから2045年問題やさらなるICTの普及、自然災害、感染症の蔓延など、変化が大きく予測が困難な時代において、アクティブ・ラーニング等を通して、自分自身が課題に対する問いを立て、児童同士で対話しながらその問いに対する答えを自ら導き出すという、どのような変化に対応できる力を身につける必要があると考える。生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、受動的な教育の場では育成することができない。ア

クティブ・ラーニングのメリットが十分に発揮されるよう、教員は、児童が自ら学び、考えられるような発問や授業の工夫が必要であると考えた。

M

私は教育格差について考える。教育格差という言葉から出てくるものは「地域格差」「貧困」「社会制度」などが挙げられるが、教育格差をなくすにはどのようにしたらよいか、他国との比較や日本の現状を含めて考察する。

様々なテーマを教育社会学では行ったが、その中でもまだあまり触れていない教育格差は日本の中で問題になっていることや、実際に私も義務教育の中で教育格差を感じたことがあるため考えようと思った。

まず私が義務教育の中で教育格差を感じたことがあるという話だが、私が特に感じたのは中学生の時高校受験をするために塾に通いたいと言い始めたことから、塾をどこにするか決めようとしたのですが、私は友達がみんな行ってる基礎から応用など過去問などの手当が厚い頭いいところところに行きたいと言ったがそこは高いからダメと言われ、比較的塾の中では安く、基本的には自分で学びたいことを主に行うような塾で学ぶことになった。塾という場所は勉強に焦点を当て教えているため教える人や環境によって学力の差は大きく出ると自分は感じる。そのため私のように自己学習のような塾とサポートが手厚い塾では格差がうまれると感じる。実際に塾の手厚さや学校によって格差はうまれるのかを調べた。

「教育格差は幼少期から始まる？データでわかる日本の現状とは」によると、子供の貧困率は 11.5%と 9 人に 1 人が貧困状態にあり、全世帯の大学への進学率が 73.2%に対して、生活保護世帯の進学率は 33.1%と半分ほどになっていた。また生活保護世帯は生活費用が厳しいため子供や本の購入を減らしたり、塾や習い事をやめるといった割合も益々多くなっている。このことからやはり家庭の収入によって子どもの学業の環境や、習い事などの自分への投資は減っていることが分かった。

次に他国での現状が気になったが、世界の 5 歳から 17 歳の子供では 5 人に 1 人の 3 億 300 万人が学校に行けていないということや、中国では学歴社会であり教育格差が広がる一方なため支援として電話とインターネットを村に設置することでいつでもビジネスを始めたり学習できる環境をつくっている。

他にも豊かな国とされるスイスでは大学進学率は 20%と低水準ではあるが、大学進学コースと職業訓練コースに分かれることが出来るため、分野にあったものを伸ばすことができ生産性を高めた教育を行っている。

これらのことから日本に足りないものは「型にはまりすぎている」と感じた。日本ではいい高校に入ればいい大学にいかけて、いい職業につけるなどの風潮があるがこの先は VUCA であり予測不可能である。そのため国が教育への公的支出を増やし資金がない子どもたちも最低限の学習が自ら行える環境を手配することや、それぞれの子どもにあった学習を教

師が手立てすることが重要であると考え。

読売新聞 2022 年 10 月 4 日「教育機関への公的支出割合、日本はワースト 2 位」では、経済協力開発機構（OECD）は 3 国内総生産（GDP）に占める教育機関への公的支出の割合を発表し、日本は 2.8%と、データのある加盟 37 か国中 36 位だったと記載されており、日本は公的支出が少ないことが分かる。

これらを通して教師の家庭環境の理解とそれぞれの子どもに対しての手助けをし格差をなるべく埋めることや、公的支出を増やし国全体として教育格差を減らすために自分の言葉や武内教授のように本などで発信していくことで、地道ではあるが教育への公的支出を増やすきっかけとなると考える。

N

教育と競争には深い関係性が存在する。そこで私は教育において選抜機能の必要性、競争の意義について述べる。教育に選抜機能性や競争は必要だと考える。なぜなら、成果や目標を達成するために大きな動機付けとなるからである。受験においてもライバルがいることでモチベーションが維持されたり、比較対象がいたりすることにより自己分析が行いやすいと考えた。たしかに、選抜や競争により子どもたちに精神的に悪影響を及ぼす可能性や、競争にとらわれすぎて本当の目的が見えなくなる恐れもある。それでも教育において選抜機能、競争は必要だと考える。

今の社会では競争が当たり前となり「競争社会」とも言われている。社会だけではなく学校の中にも競争が常に隣にあるものである。しかし、昨今では他人と自分を比べるべきではないという考えが注目を集めている。これは競争により精神的に苦痛を負ったり、後ろ向きになってしまう恐れがあるからだと考える。東洋経済オンラインの記事に、『いろいろな競争の方向性を用意して、勝つ体験をさせる、あるいは、勝つ体験をすることは非常に重要だ』と記されていた。これは、子どもたちに自信をつけるために必要なことだと考えた。自信を持つことで、前向きに物事を考えられるようになり、目標に向かって堂々と行動できるようになる。自信をつけるには、競争をして優越感を得て、自己を愛せるようになる必要がある。そのために、一つでも自分の優れている部分を教師が競争を上手く用いて見つけさせることが重要だ。子どもたちに競争をさせるには教師が十分に配慮し支えることでうまく活用できる。教師の支えが子どもたちの競争での学びを左右すると考えた。

今の時代、これからの時代なにが起きるかわからない、将来の予測が困難な時代になっている。新型コロナウイルスや能登半島地震、地域温暖化、その他にも様々な誰も予想していなかったことが淡々と起こっている。そんな時代に対応するべく、より良い人材、能力を持つ人を育てなければならない。『先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態』のことを VUCA(ブーカ)と呼ぶ(グロービス経済大学院)。Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の四つの単語の頭文字をとった造語。VUCA 時代を生き抜くために、対応力や柔軟な思考、より優れた能力を持つ人材を選抜したり、競

争させより力を高めることが重要だと考えた。様々なところで適用され社会を豊かにする力を身に付けるには選抜や競争を経て個人の能力を引き上げるきっかけとなるだろう。教育は子どもの未来を豊かにするものであり、教師はその未来への道を作るサポートをしなければならない。選抜、競争など子どもたちが互いに高めあえることは改めて必要だと考えた。

教育において選抜と競争は子どもたちにとってより良い成長をするための一つの手段だと考える。選ばれるか選ばれない、勝つか負けるという結果だけが見られてしまいがちだが、それまでの過程を見ることも大切なのではないだろうか。自分がどれだけ頑張れたのか、頑張ったことは失われず必ず自分の糧となる。教師はそのサポートを徹底するべきである。子どもたちが落ち込むことや苦しいと感じることを少しでも減らし支えていく。そうすることで教育において選抜と競争はより良いものとなると考える。

参考文献

- ・『東洋経済オンライン』 <https://toyokeizai.net/articles/-/77324>
- ・『グロービス経済大学院』 <https://mba.globis.ac.jp/careernote/1046.html>

〇

私は、第11回の「生徒文化(子ども文化)について」を取り上げる。

私の将来の夢は小学校前科と中学校社会の教師である。2年間教職の勉強を行う上で、現在の学校において一番の課題は児童生徒全員が満足のいく学校生活を送っていないことだと考えた。今回取り上げたテーマの生徒文化(子ども文化)を選んだ理由はこの課題の原因の一つで教員が対策しづらい事項であると感じたからである。

まず、生徒文化(子ども文化)とは生徒たちの独自のルールや規範のことである。この生徒文化は別名裏校則と呼ぶ。裏校則とは生徒たちが自ら作っている暗黙のきまりのことである。

この生徒文化は主に部活を通して生じるものであると私は考えた。部活とは、顧問の指導の下で学生・生徒が始業前や放課後に行う運動部・文化部などの活動のことである。部活は学校と別の活動であるからこそ校則(指定の制服・ジャージ、髪型)に縛られない特性がある。ただ、その分学校の名を背負って活動しているため周りの目に気を配り部則ができる。部則は部活により変わる。私は、吹奏楽部に所属しており外部で活動する際に部活指定の服や鞆を持つなどの部則があった。それと同時に今回取り扱ったテーマである生徒文化もあった。生徒文化とは上下関係が原因で生じる問題であると考えた。

私の経験した生徒文化は先輩に敬語を使ったり気を配ったりする事である。ただ、この生徒文化は団体によって度合いが変わる。私は授業課題でも言ったように高校で強豪校の部活に所属していた。中学校の際と部活の目指す目標が違うからこそ、生徒文化は度を越えていた。生徒文化が原因で部活を退部する者もいれば最悪自殺までいく者もいた。

では、生徒文化とは起きて悪いものなのかと問われるとそうではないと私は考える。

日本は昔から目上の人に対して尊敬の意を見せる習性があるため、生徒文化は日本独自の文化であるのではないかと考えた。

私は、目上の人を尊敬することは人間として素晴らしいことだし日本人にしかできない取り柄だと感じる。何事も先輩から社会を生きるための方法を学びそれを活用しながら生きていく世の中であるからこそ恩を敬意として返す考えは素晴らしいと感じる。

ただ、生徒文化の度は考えた方がいい。先輩であっても敬意を利用して自分がされて嫌なことでも気づかずに指示してしまうケースは現代において多い。生徒文化が現代において取り上げられるのもこうした調節ができる児童生徒を育ててほしい気持ちからではないか。

教師は敬語や気遣いにおいて先輩に任せているケースが多い。生徒文化の調節を行うようにするためには教師が敬語や気遣いの在り方を教え、間違った方向に動かさないように指導することだと考える。

最近では部活を地域の人が行うようになり、教師が部活に関われる機会が減ったからこそ学校の教師の一番の仕事である「学びを働きかけること」を活用し、上下関係の在り方について指導する時間を作るべきであると私は考えた。

現代は、いじめや不登校が重要視されている背景があるからこそこれらが生じる原因を掘み、対策を探求することが教師を目指すものの課題であり私自身の考えるべき内容であると考えた。

P

今回私は第9回講義(学校における安全教育)より、“防災教育”について考えていきたいと思う。講義後の課題では“いじめ問題”について取り上げたが、能登半島地震をはじめとする災害が多発している現在、防災教育の重要性を改めて考え直すべきであると考え、今回取り上げることにした。

今回私がテーマとして取り上げたいのは、「学校で行われている避難訓練の在り方」である。先日、毎週ボランティアで足を運んでいる小学校で避難訓練が行われていた。その際、「児童はどれだけの危機感を持って避難訓練に参加しているのだろうか」と疑問に感じた。実際に私が小学生の頃も、心のどこかで「どうせこの訓練が役立つ日は来ないだろう」と考え、甘く見ていたように思う。それから十数年が経ち、東日本大震災や能登半島地震という、決して他人ごとではない出来事が起こっているのにも関わらず、避難訓練のやり方や子どもたちの姿勢に大きな変化は見られない。果たしてそれで良いのだろうか。また、講義資料には、映像の見方によっては現実感が薄れてしまうとある。このようなことにも気を付けなければならない。そこで私は、効果的な避難訓練にするためにはどうしたら良いのかを考えることにした。

現在の避難訓練について2つ考えたことを述べたいと思う。まず1つ目は、現在の避難訓練が現実的であるのかということである。学校の訓練では、教師が放送で指示をすることが

多い。先日見学した避難訓練や私自身が経験した避難訓練のどちらも放送で指示がなされていた。しかし実際に災害が発生した際、放送で指示を出す余裕があるのか、また、停電や崩落等で放送が実施できない場合もあるのではないかとこの疑問が残る。そのため普段から、放送での指示がなくても避難できるように訓練しておくべきであると考えている。

2つ目は、訓練の流れが毎回ほぼ同じであるということである。例えば、最終的に“校庭”に避難するというゴールが同じであることや、自ら考え・行動する場面が、「火災の発生場所によってAかBのルートを選択する」くらいしかなかったりすることが挙げられる。どんな状況でも校庭が安全であるわけではないし、訓練以外の場所・状況で火災等が発生したときに避難ルートを自ら選択できる教育ができていても考えにくい。そのため、どうしてその場所に避難するのかを考えさせたり、避難するルート・場所を自ら選択するような訓練を行ったりすることも必要になるのではないかと考える。

以上のことから私は、現在の避難訓練は、決められた/指示されたことをそのまま行うだけのものになってしまっていると感じる。それでは児童が、「やらされている」という意識を持ち、自分のこととして考えられない・危機感を持って取り組めないのも無理はない。そのため今後の避難訓練では、「児童自らに考え・行動させる場面を用意する」ことでより効果的なものになるのではないかと私は考える。常に危険と隣り合わせであることを自覚し、防災意識を持って生活できるような防災教育を行えるように、今後も考え続けたいと思う。

Q

私は「教育社会学」の授業で取り上げられたテーマの中から、ジェンダーと教育に焦点を当てて考えていきたいと思う。授業資料から、私たちは性別と聞くとセックスという生物学的な性で考えてしまうが、男女のみではないジェンダーを性別として考えるべきだと学ぶことができた。ジェンダーについてはSDGsの目標5にも設定されており、世界の問題である。私は、日本のジェンダーに関する現状や、実際にジェンダー教育はどのような取り組みが行われているのかということが疑問として挙げられるため、調べていきたいと思う。

1つ目のジェンダー問題に関する日本の現状として、2021年のグローバルギャップレポートによると、日本は先進国のうちほぼ最下位だと述べられている。特に政治分野において顕著に表れている。

2つ目のジェンダー教育について、文部科学省の「性同一性障害に係る児童生徒に対する学校の支援の事例」において、自身の性自認で体操服や制服、名簿などを用いることができると示されている。また、内閣府の男女共同参画局では、男女共同参画をテーマとした副教材が提示されていた。

この2つの疑問について調べたことを踏まえて考察していきたいと思う。

1つ目の日本の現状について、私は日本はジェンダー教育が先進国の中でも進んでなく、効果も薄いと思った。実際私が小学生だったときにジェンダー教育のようなものを受けたことがなく、社会科の男女共同参画という語句が出てきたときに触れる程度で、ジェンダー

教育に力を入れていなかったと思う。この結果を見て、教育現場でのジェンダー教育を他教科の1つとして組み込むのではなく、時間を作るのが大切だと思った。

2つ目のジェンダー教育について、私が他の授業で学んだことから、学校の環境と教員の意識が重要になってくることがわかった。学校の環境においては、トイレや帽子の飾りなど男女という2つの区切りができてしまうことにより、ジェンダーで悩んでいる子どもが苦痛を感じてしまっているのではということである。特にトイレは変えることが難しいものだと思うので、支援方法を見つけ出す必要があると思う。教員の意識については、呼び方や接し方などである。全員「～さん」で呼ぶであったり、女らしく男らしくという考えを捨てることであったり、教員自身がジェンダーについて関心を持ち、理解を深めることが大切だと思う。

日本のジェンダー教育について、今後の教育現場では迅速な対応と適切な支援が大切で、世界においても大きな問題であると伝えていくことが必要だとわかった。私は自分が教員になったときにジェンダー教育を行えるように、どのようにしたら伝わるのかなど授業内容を今からでも考えることや、ジェンダーに対する理解を深めておくことを大切にしていきたいと思う。

(参考文献)

・ World Economic Forum 「Global Gender Gap Report 2021」

<https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2021/>

・ 文部科学省「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm

・ 内閣府男女共同参画局「男女共同参画をテーマとした副教材」

<https://www.gender.go.jp/public/subtextbooks/index.html>

R

私は、教育社会学の授業で取り上げられた「ジェンダーと教育」について述べる。

第13回の授業でも述べたように、教育現場には未だに隠れたカリキュラムが存在する。例えば、ランドセルの色や外見の特徴から「男女」を区別する性のラベリングなどだ。このような教育現場での暗黙のうちに伝えられる価値観や規範などは、親や教師の振る舞いやメディアの影響が関係していると私は考える。親や教師との関わりの中で、「男だから、女だから」という考え方を子どもが身につけてしまったり、教師が「○○くん、○○さん」と名前の呼び方で男女を区別してしまったり無意識な行動が子どもにとってはジェンダースキーマの獲得になってしまう。また、メディアの影響も強く、教科書の題材等にも隠れたカリキュラムは存在すると私は感じている。上記のような教育現場での性に関する固定概念を無くすために、私は二つのことを提案する。

一つ目は、性教育を適切に行い、充実させることだ。なぜなら、私も含めてジェンダーに関しての知識が曖昧であり、知る機会が不十分であると考えられるからだ。性教育を適切に行うた

めには、親や教師がジェンダーについて知らなければならない。また、充実させるためには、教室や授業の環境を整える必要がある。このように、ジェンダーの多様性に関する正しい知識を持ち、関心を示すことで、子どもたちも受け止めることができるのではないかと考えた。二つ目は、性に関する悩みを打ち明けられるようにし、配慮することだ。なぜなら、性別に違和感を感じる子どもは学校で経験する悩みがあり、それらを打ち明けられるようにしなければ、教育現場で対応ができないと考えるからだ。例えば、教育現場には髪型や着替えなどに悩みを感じる子どももいる。そのための支援をできるようにするには、子どもが性別に違和感を感じていることを知らなければならない。教師は、子どもの悩みに寄り添い、ともに納得のいく形で支援を行うようにするべきだ。

このように、教育現場には多くのジェンダーに関する隠れたカリキュラムが存在する。子どもたちが楽しく学校に通えるように教師は、ジェンダーに関する知識や支援の方法を知らなければならない。また、子どもが打ち明けられるように、環境を整え、性別に囚われた考え方や発言は避けるようにするべきだ。しかし、上記のような考え方は、教育現場だけでなく、社会全体でも同じ考え方であるべきだと私は考える。誰もが自分らしくいられる社会を作るためには、教育現場だけでなく社会全体でも性の多様性を認める考え方、制度、支援をするべきだと考える。以上が、「ジェンダーと教育」に関する私の考え及び提案である。

S

私は第13回目のジェンダーと教育について取り上げる。理由としてはこの2年生の期間、ジェンダーについて考える機会が多くあり、興味をもったからだ。もちろん社会学でも理解を深めたが、前期の1,2年合同ゼミでSDGs⑤『ジェンダー平等を実現しよう』から私たちができることと題してポスター発表を行った。また後期の『子ども学』では子どもとジェンダーについて考える機会があり、ジェンダーの多様性を理解してもらうにはどうしたら良いか授業プランを考え、発表した。このように子どもや自分たちからの視点でジェンダーについて考えたが、教員を目指している身として私は『ジェンダー』という特別な教科を導入するべきだと考えた。

世界経済フォーラム(WEF)の男女格差の現状を各国のデータをもとに評価した「Global Gender Gap Report」(世界男女格差報告書)の2023年版によると、日本のジェンダーギャップ指数は146カ国中125位で、前年(146カ国中116位)から9ランクダウンしており、G7の中では最下位である。(※1)順位は2006年の公表開始以来、最低であったという結果が示されている。先進国なのにこんなにも順位が低いのに疑問をもったが、先進国だからこそ改善の余地は大きくあるのではないかと思った。そこで充実して義務教育と位置づけられている『教育』の面に目を向けて私は先程述べたような特別科目の設立を考えた。学活や総合的な学習の時間で取り上げるだけでもいいとは思っていたが、『子ども学』でジェンダーについて詳しく学んだ際、初めて学ぶことは沢山あり、また教えるとなった時にはたくさん時間が掛かるのではないかと思い、今回この考えに至った。

現代の日本の教育は AI や情報の発展といった社会の変化により、子どもたちが学校で学んだことを、明日、そして将来、社会に出てからも活かすことができるように、「何ができるようにになっているか」を強調する学びになっている。その現代にも相まって、ジェンダーには自分の考えを重点的に示す箇所が必要だと思った。ジェンダーにはその学んだだけでは何も身につかないと考える。知識を得てそれを自分の気持ちやそのことに対してどう行動するのか・どうジェンダーや多様性に関わっていくのかが求められる。そのため授業展開として教員がただ単に教えるのではなく、その教わったことをどのように活用していくのか自分の考えを持つことが必須であると考え。私は 13 回目の授業で『男は生きづらいと思うか』について述べたがこの感想や考えたことを授業をするときにはメインにするということである。実際にも振り返って思ったことをかく、これからどうしたいかをまとめなどがあげられる。(※2)私はこの 13 回目の講義から得たこととして児童を見る時、セックスやジェンダーの観点ではなく(男と女を区別せず)、1 人の児童として見ることと述べたが、それを解決するには半強制的に教科にすることで児童に自然にジェンダーの知識が身につく、私生活に対応できたり、教員もジェンダーに関する個別対応が減少するのではないかと思う。

実現はできなくても教員になった際、ジェンダー教育は欠かさずに行うべきだと思った。

参考文献:

※1 『【ジェンダーギャップ指数】日本、2023 年は世界 125 位で過去最低 政治・経済改善せず』朝日新聞デジタル(2023,6,21)

※2 『授業実践事例集-男女共同参画・ジェンダーの視点を広めよう!-』静教組男女共同参画推進委員会(2016,4)

T

私はこれまでの講義で、第 13 回のジェンダーと教育が 1 番印象深いものであった。今何かと話題になっているジェンダーについて日本はなかなか正しい知識が普及してないのではないかと考える。さらにジェンダー教育というものに興味を持ち世界と日本の現状について少し調べてみることにした。

世界フォーラムが今年発表したジェンダーギャップ指数の日本の順位は 146 カ国中 125 位であった。私自身、女性起業家や共働き世代が増えたように感じてはいるが日本は海外と比べるとジェンダー不平等を解決できていないと思う。性別による偏見や固定概念は、子どもの時に学校や家庭で受けた教育の影響が大きいといわれている。例えば、幼少期に「男の子なんだから泣いてはだめ」「女の子はおままごとをしよう」など、性別で決めつけられた経験が誰でも 1 度はあると思う。発言者に悪意はないものの、このような偏見もジェンダーの問題になる。性別の壁をなくすためには、自己形成のベースになる幼児期から青年期にかけて行うジェンダー教育が不可欠だと思う。

北欧やヨーロッパ諸国では、ジェンダー教育を支える法律が定められていることが分か

った。イギリスでは、2010年にジェンダーレスを目指した「平等法」が制定され女性の不利益な取扱いや性別による差別を禁止している。性別だけで判断したり、強要したりする指導を違法としたのだ。また、スウェーデンでは教育法を改訂し教育機関で、「男なのだから強くあれ」「女の子らしく大人しくしなさい」など性別の固定概念を植え付けるような指導することは、すべて違法とした。このように、国のジェンダー教育の質をあげるには法律を変えていく必要があるのではないだろうか。

私が教員になった時に、ジェンダー教育のひとつとして出来ることを3つ考えみた。

1つ目は、呼び方を「さん付け」に統一するという事だ。幼少期時代、女の子だから「〇〇ちゃん」、男の子だから「〇〇くん」と当たり前のように呼んでいたがジェンダー平等の視点から考えると、ふさわしくないと思う。性別の区別なく使える「さん付け」を教師自らが使用することでジェンダー平等の実現に繋がるのではないだろうか。

2つ目は、性別を基準に色を決めないということだ。例えば、数十年前は男の子は黒系、女の子は赤系のランドセルが一般的だったが、今は多様化している。性別関係なく、黒、茶、青、赤、紫など、自分が好きな色のランドセルを背負って登下校しているのをよく見かける。このように、性別で色を指定する風潮こそ変えていくべきだと思う。

3つ目は、指導の中で「男の子らしく」「女の子らしく」を使わないということである。私が小学生の時はリーダーや委員長を決める時、男子に偏っていたと言える。性別ではなく、個々の個性を生かした教育的活動をするということが必要だと思う。

私たち一人ひとりも子どもの見本となるように固定概念を疑い、日常生活に隠れたジェンダーの偏見に縛られないことが大切だと思う。

U

私は、計13回の講義の中で、特に印象に残った「ジェンダーと教育」について考えた。まず、「ジェンダー」とは、生物学上の雄雌を示す「セックス」に対して、男/女らしきのような、社会的・文化的につくられた性差のことである。このジェンダーは、人間の社会や文化によって構成された性であり、学校教育とも密接に関わっている。

学校生活を思い返してみると、私は名簿の順番や運動面から、講義資料19では、教育内容や教科書の登場人物からというように、多くの場面で「男女の違い」があることに気がついた。この違いは、典型的な男女のイメージから生まれたもので、男女差別につながるきっかけになると私は考える。一例として、室内遊びが好きな男の子に「男の子なんだから外で遊んできなさい!」と教師が指示することが挙げられる。このような経験を通して、「男/女はこうあるべき」というような価値観を植え付けられ、生物学的性に基づいた振る舞いや見た目にとらわれるようになり、そこから外れた子どもを差別してしまうのではないだろうか。このような差別から生まれるいじめなどの学校問題を引き起こさないためにも、ジェンダー教育を推進していくことは、非常に重要であると考えます。

また、ジェンダーは「SDGs (持続可能な開発目標)」の目標5にも掲げられている重要な

国際課題である。興味をもって調べていくうちに、2023年の日本のジェンダー平等達成率は64.7%で、146か国のうち125位と過去最低の順位であることがわかった。

(WEF.2023.6.21.) この結果は、歴史的背景に基づいた男女格差が依然として解消されていないことや、講義でも述べられていた女性管理職の割合が低いことを示唆していると考えられる。

以上のことから、講義を通してジェンダーについて考え、未だに多くの課題があることに気がついた。この課題を少しでも解決に導くためには、ジェンダーはグラデーションで、無限に存在するという前提を全員が持つことや、当事者だけでなく、周りの人々も身近な問題として捉え、互いの気持ちを尊重しあっていくことが大切であると考えられる。そして、私自身、男/女らしさではなく、その人らしさを見つけられるような教師になりたいと強く感じた。

(61名中21名の解答を記載)